

慈悲の女神

ヴィナヤ・デ・ラ・エラン

今年の5月初旬の素晴らしい日のことでした。真昼の太陽は頭上で輝いていました。空は澄み、ほぼ雲一つない青空でした。おまけにその日は暑く——実際、今年それまでで一番暑い日で、風のない大気の中に熱がこもっていました。

さて、まさにこの日、大気は静止していたかもしれません。けれども周りに小さな子どもがいる時は、その子どもの足音、高い声、そして元気なエネルギーが、いつもわくわくする波動を生み出します。

そして、4歳のローヒトもそうです。彼はシッダ・ヨーガの道のウェブサイトのかわいらしい映像や、ライブ動画配信で開催されたシッダ・ヨーガ・サツァングで太鼓の演奏をしたことから、多くの人々に知られるようになりました。

テンプルのバガヴァーン・ニッティヤーナンダを礼拝する日課のために、ローヒトが母親と一緒にアヌグラハに着くと、まず決まって聞きます。「僕、グルマーイともダルシャンできるかなあ？」母親があいまいな返事をする、ローヒトは、「グルマーイに会いたいなあ！一緒に遊びたいなあ！」と言うのです。

この日、ローヒトの願いがかないました。

グルマーイは、外のシヴァ・ナタラージュの像の所で、テンプルを訪れた後の彼を見つけると、「小川まで私と一緒に歩かない？」と尋ねました。

ローヒトは「行く！」と言いました。彼はクスクスと笑い始め、近くの小川に向かって走り出しました。ローヒトにとって、完璧な日でした——グルマーイと二人っきりです。

ローヒトの母親は、シッダ・ヨーガの道のウェブサイト用の写真を撮るセーヴァーをささげるために、アヌグラハの中庭に行くところでした。そこでグルマーイは彼女に、小川に来てグルマーイとローヒトを探すよう私に伝えてと頼みました。

ローヒトはこれを聞くなりグルマーイに、「どうして？ どうして他の誰かが、僕たちと一緒に来るの？」と言いました。

グルマーイは、「ヴィナヤは私たちの手伝いをしてくれるのよ」と言いました。

彼が再び、なぜ私が彼らに加わるのかと尋ねると、グルマーイは、どんな仕事や用事ができたとしても、私が手伝えるように一緒に来るのだと説明しました。

数分後に私が到着すると、グルマーイは「ねえ、ヴィナヤ、あなたは私たちのために用事をやってくれるのよね？」と、私に言いました。

私はローヒトの方を向いて、「そうです、私が来たのは——用事をするためですよ！」と大喜びで答えました。

ローヒトは聞いたことを繰り返すのが好きなので、彼は「そう、ヴィナヤは用事をする！」と私に言いました。それからグルマーイを見て、「用事をするってどういうこと？」と尋ねました。

「私たちがやってほしいことを何でも、彼女はやってくれるのよ」と、グルマーイは言いました。

「僕たちがやってほしいことを、何でもやってくれる」。ローヒトは繰り返しました。私がグルマーイと彼の時間を邪魔しないことを知って、ローヒトが落ち着いたことが分かりました。

小川に向かって歩いていると、私たちの周りに現れた景色はあたかも 1 枚の絵画から浮かび上がったかのようでした。何カ月もの間、アーシュラムの敷地は白い雪の毛布で覆われていて、それから、突然の土砂降りにたびたび見舞われ、ぬかるんでいました。ようやく、この日、空は真っ青で、太陽は輝いていました。私たちはグルマーイと一緒に、小川に向かって歩いていました。

歩き続けながら、小川の両側に並んでいる木立を目にし、その緑の天蓋を通り抜けてきらめく木漏れ日をほれぼれと見ていました。地表を覆う植物やあらゆる種類の花々が、新鮮な春の大地に芽吹いていました。（「グルマーイ、見て！」と、ローヒトが興奮して黄色と白の花を指さして言いました。「スイセンだよ！」「そうね、ローヒト、よく知っているわね！」と、グルマーイが答えました。「本当にスイセンね」）鳥たちもさえずり、その甘い歌はこの美しい日へのささげ物のようでした。

時折、ローヒトはグルマーイに、「これからどこに行くの？」と尋ねました。彼がこう尋ねるたびに、グルマーイは彼に景色を眺め、その瞬間を楽しむよう促しました。ローヒトはグルマーイが意図することを完全に理解し、ちょっとの間、まさにそうしました。それからすぐに、また尋ねるのです。「小川にはいつ着くの？」それほど長く歩くわけではないけれど、4歳の子には、はるかに遠く思えたのだらうと、私は気づきました。

ようやく私たちは目的地に着きました。小川に架かる真っ赤な日本風の橋を渡っている時、ローヒトはグルマーイに言いました。「さあ、小川に着いた。次はどこに行く？ 何をする？ 遊ぶ？」

グルマーイは、「そうね、今は橋を渡っているわね」と言いました。

ローヒトは、「この橋、好き」と言いました。

グルマーイは言いました。「ペンキが剥げかけているから、いつかあなたがペンキを塗ってもいいわね」

「うん、塗りたい。そうしたらとってもきれいになるよ！」と、ローヒトは言いました。

その小さな橋を渡ると、大きなツツジの茂みが私たちを出迎えました。ちょうどほころび始めたピンク色のつぼみが広がっていました。ツツジの茂みの花が開いた枝越しに、グルマーイは、小川を見下ろす観音菩薩の像が、いまだに白いシートで覆われていることに気づきました。

アーシュラムの庭には至る所に多くの神の像があり、それらには冬の初めに、悪天候から守るためにシートが掛けられていました。しかし、他のすべての像の覆いは何週間も前に外されていたので、観音菩薩がいまだにシートで覆われていたのは不可解でした。

グルマーイはやるべき仕事があると分かりました。しかし、ローヒトが小川に着いたらやりたかったのは、遊ぶことだけでした！ 私は、グルマーイがどうやってローヒトに、この計画の変更を納得させるのだろうと、思ったことを覚えています。すると、彼女が言うのが聞こえました。「ローヒト、あなたはセーヴァーをささげることが大好きなのを知っていますよ。だから、今からセーヴァーをしましょう」

ローヒトは言いました。「本当に？ セーヴァーをするの？ 遊びは？」

グルマーイはこの新しい計画を変えようとせず、言いました。「そう、覚えてる？ ヴィナヤは用事してくれる、私たちが手伝ってほしいことを何でも手伝ってくれるって」

ローヒトはうなずいてその辺を歩き回り続け、注意を反らしました。「グルマーイ」と言って、彼は水際の大きな岩の上に上がりました。「ねえ、聞いて。僕がどこに立っているか見て。この岩の上だよ。僕は端っこの方には行かないよ。ただ岩の上のここに上がろうとしたんだ。もっと先まで行っちゃったら、小川に落ちちゃうし、そうしたくはないから」

グルマーイは言いました。「それは賢い、ローヒト。あなたは本当に頭がいいわね！ ではセーヴァーに戻りましょう。いらっしゃい、ヴィナヤがどうやってシートを剥がすか、あなたに教えてくれるでしょう」

ローヒトは像の方に戻って来ました。彼はシートが何を覆っているのか知らなかったもので、その下には何があるのかと尋ねました。グルマーイは、「それは内緒」と言いました。

「教えて、教えて、知りたい！」と、ローヒトは言いました。

再び、グルマーイは言いました。「ローヒト、内緒」

ローヒトは、最初はやり方がよく分からないままに、シートを固定していたロープの結び目の一つを恐る恐るほどき始めました。そこで私は、とても簡単なことなのだと見せてあげました。結び目が緩んでくるのを目にした途端、彼は笑顔になりました。すぐに、彼はロープを解くという作業が気に入りました。

ロープはだんだんと緩くなり、ローヒトはますますこの作業を楽しんでいました。そしてその時——2本目のロープがとうとう地面に落ちてシートが外れた時——突然、幾つかの音が混ざり

合った優しい音色が聞こえてきたのです。その音がどこから出ているのか、全く分かりませんでした。けれどもそれを聞いた時、私たち全員の心が大きな喜びで弾みました。

グルマーイは、その音の出て来る所を探して見上げました。グルマーイの目は、橋の近くの木
の枝に掛かっていた金属製の赤いウインドチャイムに留まりました。

グルマーイは、「ローヒト！ 慈悲の女神、観音菩薩がとても喜んでいるわ！」と言いました。

グルマーイは繰り返し言い続けました。「彼女がとても喜んでいるわ！ とても喜んでいるわ！」
ローヒトも私も、グルマーイの喜びを、観音菩薩の喜びを、自然の喜びを、そして私たち自身の
内なる喜びを感じました。

私たちがシートを取り外そうと緩めたことで観音菩薩が呼吸する空間を与えたのだと、そして今、
ウインドチャイムの歌を通して、女神は喜びを表しているのだと、グルマーイは私たちに説明し
ました。

私が気づいた一つの重要なことは、風は吹いていなかったということです。実際、他の木々の
枝を見回しても、この暑い日にどれも全く動いていませんでした。しかもこのウインドチャイムは
重たいので、動かして音を出すには強い風が必要だったでしょう。しかし、グルマーイがローヒ
トと私に何度も言ったように、この音を奏でたのは観音菩薩だったのです。私たちは彼女を自
由にしました。彼女は私たちにチャイムを鳴らすことで、その喜びを知らせていました。そして
私たち自身、それを体験することができたのです。

ウインドチャイムは、私たちが観音菩薩からシートを外して、その下に重なっていた気泡シート
をはがしている間、途切れることなく鳴っていました。そしてローヒトはついに、自分が覆いを外
していたのが誰なのか分かりました。ローヒトはやっと観音菩薩とのダルシャンを得ました。長

い耳たぶの耳、半月のように閉じた目をした、白灰色の石で彫られている女神の像とダルシャンをしたのです。彼女は片方の脚をもう一方の脚の方へ曲げて瞑想的な姿勢で座っていました。その表情は完全に穏やかで、完全に落ち着いて、完全にくつろいでいました。

ローヒトがその像を見ていると、グルマーイが、「観音菩薩！」と声を上げました。

ローヒトはグルマーイを見上げて、「この人は誰？」と尋ねました。

グルマーイは、「彼女は慈悲の女神。彼女はとても喜んでいるわね、ローヒト」と説明しました。

ローヒトはグルマーイに、分かっているというふうな笑顔を向けました。見ていてとても愛らしい姿でした。一体なぜ彼はそのような笑顔を向けたのでしょうか。なぜなら、ローヒトは、すべての仕事は 100 パーセント終わらせなくてはならないと、100 パーセント分かっているからです。彼の両親は、おもちゃを片付ける、食事の後はテーブルをきれいにする、といった素晴らしい規律を教え込みました。ローヒトはとても仕事熱心なのです。そして実際、シートやロープが地面にそのままになっていることに、彼は気づいていたのです。

しかし、自分の計画が無しにならないようにしようと、ローヒトは喜々として、「グルマーイ！ さあ、遊びに行こう！」と言いました。

グルマーイは言いました。「ローヒト、セーヴァーはまだ終わっていないの。白いシートを畳んで、どこかにきちんと置かなくては」

ローヒトは今度はその場で足踏みをして、どこか別の場所へ行行ってグルマーイと——しかも私抜きで——遊びたがって、グルマーイが言ったことが聞こえないふりをしました。

「グルマーイ、遊びに行こう！」と繰り返して言いました。

グルマーイはもう一度、「ローヒト、私たちはこのセーヴァーを終わらせる必要があるの。来て、私が白いシートを畳むのを手伝ってちょうだい。ほら、ヴィナヤはもう始めていますよ！」

ローヒトについて私が一つ気づいたことは、彼はちゃんと聴いていて、そして前にも言ったように、仕事を完了することが大切だと理解していることです。そうして彼はシートを畳もうとかわいらしい手を差し伸べ、そして楽しそうにそれをやりました。

この最も美しく素晴らしいセーヴァーの仕事——神の存在の体験を私たちに与えてくれた仕事——を終えると、私たちは皆で小川に沿って歩き、私たちの心は一層の幸せで高揚し、一層の満足で鼓舞されました。その上、その数分後にローヒトの遊びの時間が始まる頃には、彼の心はすっかり大きく開かれていたに違いないと私は思うのです——なぜなら、彼は私を、そのままそこにいて彼とグルマーイと一緒に遊ぼうと、実際に誘ってくれたのですから！

